

## 私の国における職業とジェンダー

### 李 昌翼 (韓国)

韓国の女性経済活動参加率は、IMF時代といわれている1998年に47.1%に急増した後、2005年には50.1%、2006年には50.3%と徐々に上がりはじめましたが、再びグローバル金融危機で2009年に49.2%まで落ちています。OECDの集計方式による韓国の2009年の女性経済活動参加率は53.9%ですが、OECD平均である61.3%、日本の62.9%、アメリカの69%に比べても大きな差が見られます。

しかしながら、2010年の女性就業者数は991万4千人になり、グローバル金融危機以前の水準を上回っているとの新聞記事を読むと心が温まります。

[表1] 職業別女性就業者(2005-2010年)

単位：千人、%

	2005		2010	
議会議員、高位役職員および管理職	45	0.5	53	0.5
専門職	1,624	17.0	2,030	20.5
事務職	1,654	17.4	1,768	17.8
サービス職	2,068	21.7	1,614	16.3
販売職	1,449	15.2	1,540	15.5
農林・漁業職	765	8.0	588	5.9
技能職	388	4.1	325	3.3
装置・機械操作及び組立て職	349	3.7	329	3.3
単純労務職	1,183	12.4	1,667	16.8
合計	9,525	100.0	9,914	100.0

資料：韓国統計庁ホームページ、アジア経済新聞 2月15日

女性就業者を職業別にみると、まず専門職が、2005年にはサービス業、事務職に次いで162万4千人でしたが、2010年は203万人になり1番になりました。また、議会議員、高位役職員および管理職、専門職、事務職のような、いわゆるホワイトカラーの比率が、34.9%から38.8%に大きく増加しました。

次に、単純労務職が大きく増加したことです。単純労務職が増えていることは女性のみならず、韓国社会全体にとってあまり良いことではないと思います。ホワイトカラーの増加は、労働者数や所得の増加により量・質的成長を成し遂げることができる反面、単純労務職が大きく増加することは、所得の減少により量・質的成長を止めてしまいます。したがって、結果的にはそれぞれの職業における所得格差が大きくなる可能性が高くなります。これは非常に重要な問題であり、どのように解決できるかが、そもそも問われる時代になる

と思います。

最後に、技能職と装置・機械操作および組立て職は、一般的に男性中心の職業であると言われていています。この二つの職に関しては、女性がこれから少しずつ頑張っていかなければなりません。この5年の間に、合わせて8万3千人（技能職は6万3千人、装置・機械操作及び組立て職は2万人）減少し、厳しい状況が続いています。

しかしながら、韓国経済が発展していくためにも女性労働力は欠かせないものです。依然と変わらぬ男性中心的な職業訓練及び職業選択において、女性は男性が出来ることは私もできるという考え方で積極的に挑戦していかなければならないでしょう。また政府が女性に対する教育機会の拡大および働きやすい環境づくりに力を入れることによって、女性の職業選択がますます広がるでしょう。